

# 関心対象者から集団へ：プロファイリングの産業化

標的型の手作業による特定の「関心対象者」への精査から、全人口に対する自動化された継続的な監視へのプロファイリングの出現は、権力の行使、技術の役割、個人の自律性の境界における最も深い変容の一つを表しています。かつては多大な人的労力、機関的な優先順位付け、意図的な選択を必要としたものが、日常生活の副産物としてリアルタイムで数十億人の行動データを生成・集約・分析するシームレスなインフラへと進化しました。

この変容は技術だけによってあらかじめ決められたものではありませんでした。それは官僚機構の拡大、繰り返される安全保障危機、データ収益化に関連する経済的インセンティブ、データ収集・保存・推論の限界費用の絶え間ない低下の相互作用から生まれました。結果は単なる「より多くの監視」ではなく、質的に異なる体制です。それは自然な摩擦を摩擦のない規模に置き換え、人間の裁量をアルゴリズムによる自動化に、少数の例外的な嫌疑を多数のベースライン観察に置き換えます。

その核心には根本的な変態があります：プロファイリングは選択的で労働集約的で説明的な**職人的工芸**から、普遍的で自動化され予測的な**産業プロセス**へと移行しました。以下ではこの変容をたどり、制約が侵食され、新しい能力が継続的な人口全体への推論システムへと結晶化した瞬間を特定します。

## I. 基礎：選択的・手作業的な実践としてのプロファイリング

プロファイリングは、その最も基本的な形態において、特性を推論したり行動を予測したりリスクのカテゴリを割り当てたりするために情報を体系的に収集・解釈することを含みます。その起源は古代にまで遡ります。

古代帝国は単に課税や徴兵のためだけでなく分類のために国勢調査を行いました。ローマ当局や中国の帝国行政官は職業、忠誠心、地位によって人口を分類し、潜在的な脅威を特定できる初期の関係マップを作成しました。宗教機関は出生、結婚、告白、道徳的行動の記録を維持し、影響力と逸脱のネットワークを明らかにする原初的なソーシャルグラフを構築しました。

しかし、これらのシステムには定義的な制約がありました：**情報は高価でした**。データを収集・検証・保存・解釈するには多大な人的労働が必要でした。その結果、プロファイリングは**選択的で断続的で限定的**なままでした。それはエリート、異議者、または戦略的に関連するグループに焦点を当て——全人口ではありませんでした。

初期近代ヨーロッパでも、国家が監視装置を拡大してもこの選択性は続きました。諜報活動は異端者、政治的ライバル、密輸業者、外国エージェントを情報提供者、傍受された通信、物理

的監視を通じて標的にしました。フランスや他の国家の「黒い部屋 (cabinets noirs)」はこのアプローチを体現していました：事務官のチームが手作業で手紙を開封し、コピーし、再封して配達しました。これらの運用は本質的に制約されていました。高価値の標的に焦点を当てたのは、それ以外は物流的に不可能だったからです。

この段階でも、**メタデータ**の力は明確に理解されていました。通信に関する情報——送信者、受信者、タイミング、経路——は内容にアクセスせずにネットワークと意図を暴露できました。1844年の英国郵便局スパイ事件はこのことを公衆の面前に鮮明にしました。ロンドンに亡命したイタリア革命家ジュゼッペ・マッツィーニは、外国勢力の要請で当局が自分の手紙を開封していると疑いました。彼と支持者は封筒の中にケシの実と砂粒をマーカーとして入れました。手紙が乱された状態で届くと、マッツィーニは急進派の議員トーマス・ダンカムに議会で問題を提起させました。結果として起きたスキャンダルは内務大臣サー・ジェームズ・グラハムの発行した令状の下での体系的な手紙開封を明らかにし、激しい怒りと議会調査を引き起こし、最終的に郵便局の秘密部門の廃止につながりました。これは近代のプライバシー・パニックの最初の一つであり、関係データだけで関連ネットワークを解体できることを強調しました。

これに応じて、「通信の秘密」(Briefgeheimnis、secret de la correspondance) のような法的規範が生まれました。これらの原則は通信データの使用を配達のような運用目的に厳格に制限し、監視やプロファイリングのための二次的搾取を禁止しました。基本的な考え方はシンプルですが深いものでした：

特定の機能のために生成されたデータは、個人やネットワークのより広範なプロファイル構築のために再利用されてはならない。

この原則は何世紀にもわたって響き渡ることになります——しかし、技術的・制度的圧力の下で最終的に侵食されることになります。

## II. 官僚の世紀：自動化なしの拡大

20世紀はプロファイリングを劇的に拡大させましたが、多くの以前の制約を維持しました。総力戦の要求は前例のない情報収集を必要としました。郵便検閲、シグナルインテリジェンス、暗号解読は監視をエリートを超えてより広い人口にまで拡大しました。国家安全保障局 (NSA) のような機関は大規模な傍受を制度化し、国内機関は政治団体、容疑のある急進派、犯罪ネットワークに関する広範なファイルを編纂しました。

しかし、プロファイリングは**基本的に標的型**のままでした。盗聴は特定の個人や回線に結びつけられました。インテリジェンスファイルは人間のアナリストによって管理されました。量が増えても、**人間の注意がボトルネック**のままでした。

初期のコンピューティングシステム (1950年代-1970年代) は記録保持の規模を変え始めました。政府と企業は福祉記録、信用履歴、犯罪データベースをデジタル化し、より迅速な検索と相互参照を可能にしました。しかし、これらのシステムは依然として**離散的な記録**で動作し、行動の連続したストリームではありませんでした。

1970年代までに、中央集権的な「データバンク」への懸念が法的対応を促しました。1974年の米国プライバシー法と初期の欧州データ保護法は、目的制限、データ最小化、透明性の原則を導入しました。これらの枠組みは通信秘密の論理をデジタル時代に拡張しました。

しかし、それらは重要な仮定の上に築かれていました：データ収集が**限定的で断続的**であるという仮定です。これらの枠組みは記録を規制——流れを規制するものではありませんでした。この仮定はすぐに崩壊することになります。

### III. 変曲点：記録からデータ排気へ

決定的な転換は1990年代後半から2000年代初頭にインターネットの台頭とともに起こります——単なる通信媒体としてではなく、データを継続的に生産するインフラとしてです。

デジタルシステムは**データ排気**を生成します：通常の活動の副産物として自動的に作成されるメタデータです。すべての接続、クエリ、クリック、移動が痕跡を生み出し、無視できるコストでログ記録・保存・分析できます。

これは決定的な移行を示します：

プロファイリングはデータに対して行われる活動ではなく、それを継続的に生産するインフラになります。

インターネットサービスプロバイダーは接続ログ、DNSクエリ、ルーティング情報を捕捉し、内容にアクセスせずにさえ行動パターンを明らかにします。郵便メタデータ——一時的で分散的——とは異なり、デジタルメタデータは永続的で集中化され、些細なほど検索可能です。

このインフラの上に、GoogleやMetaのようなプラットフォームはプロファイリングを核心的な経済モデルに変えました。検索エンジンは意図を捕捉し、ソーシャルネットワークは関係をマッピングし、モバイルエコシステムは移動を追跡します。埋め込まれたトラッカーはウェブの広大な部分に可視性を拡張します。世界の人気ウェブサイトの約3分の1に存在するMetaのトラッキングピクセルは、自社プラットフォームを超えた活動を監視し、健康、金融、政治の文脈から敏感なシグナルを捕捉することがよくあります。

この環境で重要な認識が生まれます：

内容は大部分が冗長になります。多くの場合、関係パターンは意味の代理に過ぎず——内容そのものより分析的に有用です。

メタデータは単に通信が発生したことを示すのではなく、**内容の確率的な再構築**を可能にします。誰が誰と、いつ、どれだけの頻度で、どのようなより広い文脈で通信するかは、通信される内容を強く制約できます。公開された情報——共有された所属、職業的役割、政治的立場、社会的つながり——はさらに可能な解釈の空間を狭めます。

時間が経つにつれ、これらの制約は予測的になります。メタデータは記述的であるだけでなく生成的なものです。それは内容に伴うだけでなく、しばしば**内容を近似または推論**します。特

に大規模に集約された場合です。

検索クエリは意図を明らかにします。通信頻度は関係の強さを明らかにします。共同位置は関連を明らかにします。十分な規模では、これらのシグナルは直接の内容アクセスをしばしば不要にする非常に正確な行動モデルに収束します。

企業システムは収益化のために行動を最適化し、国家システムは制御のためにそれを制約します——しかし両者は同じ基盤の仕組みに依存します：**大規模な行動推論による予測**です。

## IV. 逃れられないアイデンティティ：永続的なアンカー

産業プロファイリングの定義的な特徴は**永続的なアイデンティティ**の出現です。

以前のシステムは変更可能または隠蔽可能な可変識別子——名前、文書、住所——に依存していました。現代のシステムは重複するシグナルを通じてアイデンティティを再構築します：

- デバイスフィンガープリント
- 行動パターン
- ソーシャルグラフ
- 生体マーカー（顔、歩容、声）

公開共有された画像は耐久性のあるアンカーとして機能します。アカウントを変更したり仮名を採用したりしても、特に国家や諜報の文脈での顔認識システムはデータセット間でアイデンティティを再接続できます。写真や共有イベントでの共起は推論された関係をさらに強化します。

その含意は深いものです：

アイデンティティはもはや宣言するものではなく、継続的に推論されるものです。

これはかつて監視を制約していた摩擦の多くを排除します。識別は単一のシグナルに依存せず、多くのシグナル間の冗長性から生じます。

## V. 融合：データポイントからオントロジーへ

この進化の頂点は**データ融合**です：異種のデータセットを統一された分析システムに統合することです。

Palantir Technologiesのようなプラットフォームは、政府記録、金融取引、ソーシャルメディア活動、位置データ、通信メタデータを個人とネットワークの coherent モデルに集約します。これらのシステムはアナリストが関係をクエリし、パターンを検知し、予測を生成できる動的なオントロジーを構築します。

具体的な例が移行を説明します。移民執行において、PalantirのEnhanced Leads Identification and Targeting for Enforcement (ELITE)ツールは、ビザ記録、雇用データ、電話メタデータ、社会的つながり、さらにはMedicaidやHHSの住所情報から潜在的な標的で地図を埋め、「住所信頼スコア」を割り当て、ドシエを作成します。捜査官は直接的な証拠だけでなく、**行動的・関係のシグネチャ**が以前に特定されたケースに似ているために個人を特定し、運用向けの「標的豊富な」近隣を特定できます。同様の融合は、旅行履歴、生体データ、社会データを優先順位付けに統合するImmigrationOSのようなツールにも見られます。

嫌疑はもはや発見されるものではなく、**生成される**ものです。

プロファイリングは現実を文書化するだけでなく、運用的に実行可能な確率的な関連を表面化することで積極的にそれを構築します。

## VI. 説明から先制へ

伝統的なプロファイリングは主に後ろ向きでした。過去の行動を説明しようとして——誰が犯罪を犯したか、誰が陰謀を組織したか、誰が脅威を構成したか。

産業プロファイリングは予測的で先制的なものです。それは以下を特定します：

- 誰が犯罪を犯す可能性があるか
- 犯罪がどこで発生する可能性があるか
- 誰が債務不履行、過激化、または逸脱する可能性があるか

この論理はしばしば『マイノリティ・リポート』で描かれたビジョンと比較されます。そこで個人は犯罪を犯す前に逮捕されます。現代のシステムは決定論的な先見を欠いていますが、構造的な類似は明確です：予測警察ツールは過去データ、911通報、ナンバープレートリーダー、社会的シグナルを分析して「ホットリスト」やリスクスコアを生成します。

現代のシステムは確率で動作します。個人は行動するからではなく、**それをした他の人に統計的に似ている**からフラグ付けされます。

移行は微妙ですが深いものです：

個人はもはや主に行動に基づいて判断されるのではなく、確率的な風景の中での位置に基づいて判断されます。

嫌疑は構造的なものになり——離散的な出来事によって引き起こされるのではなく継続的に生成されます。

## VII. 推論の時代の法

一般データ保護規則（GDPR）のような法的枠組みは、同意、透明性、最小化を通じて制限を課そうとします。しかし、構造的な制約に直面します。

ほとんどの法体系は**オブジェクトとしてのデータ**を規制します。現代のプロファイリングは**関係と推論**から力を得ており、これらは定義・観察・制約がはるかに困難です。

追加の課題には以下が含まれます：

- 管轄を越えた継続的なデータフロー
- 国家安全保障と「正当な利益」の広範な例外
- 監視に抵抗する不透明なアルゴリズムシステム

結果は持続的なミスマッチです：

記録の時代のために設計された法的枠組みは、継続的で予測的な推論の時代を統治するのに苦労します。

## VIII. 権力の非対称性

産業プロファイリングは構造的な不均衡を生み出します。

個人は現代生活への参加を通じて継続的にデータを生成します。回避は可能ですがコストがかかり不完全です。一方：

- 企業は秘密によって保護された不透明なシステムを維持します
- 国家は法的権限やパートナーシップを通じてデータにアクセスし統合します
- 技術的複雑さが説明責任を曖昧にします

結果は明確な非対称性です：

多くの者が可視化され、強者は比較的不可視のままです。

## IX. 内面化：プロファイリングと行動の自己規制

制度的・技術的次元を超えて、プロファイリングの産業化は深い心理的変容を生み出します。監視はもはや単なる外力として機能するのではなく、内面化されます。

このダイナミズムはミシェル・フーコーがパノプティコン分析で予見したものでした：ジェレミー・ベンサムの理論的な刑務所設計で、囚人が見えない中央の観察者に見られているため、不確実性のもとで規律を内面化し自分の行動を規制します。パノプティコンの力は永続的な観察ではなく、その**予期**にあります。

産業プロファイリングはこの論理を劇的に拡張します。個人は、行動が記録・分析・解釈される可能性のある環境で動作します——エンゲージメントを最適化するプラットフォームやリスクを評価する国家によって。不透明な方法で。結果は**自己規制**への移行です。

これは以下のように現れます：

- 投稿、検索、または関連における自己検閲

- 特定のグループ、トピック、または場所の回避
- リスクスコアを最小化するための知覚された規範との整合
- デジタルおよび物理的文脈全体での行動の修正

重要なことに、これらの適応は明示的な強制を必要としません。予期から生じます。

制御はシステムが何をするかだけでなく、個人が何を避けるかを通じて行使されます。

影響は個人を超えて広がります。人々が自己検閲し自己分類するにつれ、生成されたデータはパターンを強化し、将来の予測を形成します。システムは現実を観察するだけでなく、微妙にそれを再形成し、適合を正常化するフィードバックループを作成します。

## X. 選択的監視の終わり

プロファイリングは根本的な変容を遂げました：

- 標的型から普遍的へ
- 手作業から自動化へ
- 後ろ向きから予測的へ
- 断片的から統合的へ

以前のシステムは摩擦——コスト、時間、人間の注意——によって制約されていました。産業システムはこれらの制約を除去します。監視は周面的になります。包含はデフォルトになります。

データは即時の目的のみに仕えるべきという原則は、**すべてのデータが潜在的に搾取可能**であるパラダイムに道を譲りました。

## XI. 結論：参加の代償

郵便秘密からデジタルデータ融合への長い弧は一貫したパターンを明らかにします：各技術的拡大がプロファイリングの範囲を増加させ、法制的・社会的対応が遅れる。現在を区別するのは構造的なものです。プロファイリングはもはや特定の個人に向けられた活動ではなく、個人が存在するインフラです。

「関心対象者」のカテゴリは溶解します。誰もが継続的な評価の対象になります。

この変容は国家権力だけでなく経済的インセンティブによって維持されます。無料のように見えるプラットフォームは行動データ抽出を通じて動作します。「製品にお金を払っていないなら、あなたが製品だ」というフレーズは直観を捉えます——しかし現実を過小評価します。

生産されるのは個人ではなく、個人の**予測モデル**です——ポータブルで実行可能で、しばしばそれを表す本人にはアクセスできません。

中心的な課題は知覚と現実のギャップにあります。

第一に、人々は知られていることの**影響**を過小評価します。プロファイリングは関連を通じて動作します。過去の、弱い、または間接的な関係が結果を形作ることができます。後に望ましくなくなる人物とのつながりが機会に影響を与える可能性があります。一人は個別だけでなく関係的に判断されます。

第二に、人々は知り得ることの**範囲**を過小評価します。システムは明示的な開示ではなくパターンから敏感な属性——政治的、宗教的、性的、経済的——を推論します。これらの推論は正確性に関係なく運用されます。

個人は開示したものだけでなく、推論可能なもの——そして誰とつながっているか——に基づいて評価されます。

デジタル生活への参加は thus 暗黙の交換を伴います：利便性対可視性。この交換は透明でも交渉可能でもありません。

課題はデータ化を止めることではなく、それを制約すること——摩擦を回復し、制限を強制し、説明責任を確保することです。

中心的な質問は明確です：

永続的なプロファイリングのインフラが意味のある挑戦が難しくなるほど深く埋め込まれる前に、介入は起こるでしょうか？

そのような介入がなければ、参加の代償はデータだけではなく、観察されること、推論されること、最終的に定義されることの境界の漸進的な侵食です。